

末黒野

すぐろの

10月号 (通巻878号)



竹落葉

朝焼の雀騒げば消えにけり
竹落葉ひかる連綿体となり
炎天や太陽も死のあるといふに
練兵場跡のグランド夾竹桃
油照影の張り付くアスファルト
軍艦を打ちのめさんと男梅雨
昼顔や岸に朽ちたるいさり舟
真夜の灯に疲れを見せず水中花

松本三千夫

(名譽主宰)

水中花

花わさび双手に掬ふ沢の水
鮎釣りや烏罫に帰る頃
湖の光を弾き貸すボート
山縫うて岩をた走る滝の音
奥つ城の水音絶えず著莪の花
竹煮草刈られ光のふんだんに
バスを待つ見え隠れして大神輿
入母屋の裏の鬼灯花あかり
草取りの匂ひのままの会釈かな
一病の行きどころなし水中花
土用波ひと角崩れ総くづれ
ひそやかになでたるやうや土用風

黒滝志麻子

(主宰)

風死す

ちらほらと片仮名の札菖蒲園
マラソンの先頭速め夏木立
あめんぼう己が水輪を抜け出せず
手を伸ばし見上ぐる幼立葵
笹を手にズツクの園児浴衣がけ
紫陽花や苑の日溜り人溜り
ヒーローになりきつてをり昼寝の児
黒南風や始動の遅き船外機
若きらの造語やたらと日の盛
風死すや鯉の背鱗の水の皺
坂沿ひのアガパンサスや朝曇
白南風や桂の林明るうす

森

清

(副主筆)

堯

甲矢集

配列は音順（当月巻頭作家は
次号は末尾になり以下同じ）

梅 雨

田中臥石

なみ過ぎの流れ若布を拾ひをり
宅診の医師と目が合ふ花槐
はしり梅雨逃足早き将棋の王
青蛙跳ねて庭石残りけり
空中の駅へ西日のモノレール
暁紅の出船泡立つ青葉潮
梅干してをりまほろばの故郷恋ひ
涛どんと梅雨の銚子の隠れ岩
醬油蔵匂ふ小路の花菖蒲
海ひびく青田の水に夕日浮く

白 菖 蒲

森清信子

新緑や煉瓦造りのワイナリー
白菖蒲人近づけば穢しさう
谷戸風に彩りを乗せ菖蒲園
水音の小刻み瑠璃の花菖蒲
石鱖の匂ふ青年初蛭
沢音を風の吹き上げ朴の花
新緑や山並背の千枚田
食卓は主婦の文机新樹光
紫陽花や石橋多き城下町
籐寝椅子うつつめきたる夢覚めて



梅雨時雨

安齋久英

街燈に妖しく揺るる青葉影
灰色の雲動かざり梅雨深み
梅雨寒をかこち俳誌を積み重ね
沖波のしらじら梅雨の深みゆく
梅雨寒や安房の稜線模糊として
沖波のひたすら梅雨の中休み
じわじわと背より睡魔梅雨時雨
ほぐれゆく峯雲美しや中空に
梅雨深む視界忽ち鈍色に
峰雲の現はれ崩れ安房の崎

鮎釣解禁日

石黒興平

一村を水攻めにして田植果つ
里山の空の広やか朴の花
花栗や風重くなる通学路
薔薇咲くや鼻先寄する癖今も
腕によりかけて鮎釣解禁日
ぼうたんの崩れ敷藁彩りぬ
散髪へ梅雨の無聊を払ふべく
梅雨晴や弓道場の静と動
放課後の窓よりピアノ濃紫陽花
いい人で終りたくなし半夏雨

夏の淘

岡野里子

浜屋顔揺れて波音風の音
佇める梅雨の波止場の女傘
錆深き陸の錨や青嵐
日を返す海の碧さや雲の峰
空の青引き寄せ夏の海たひら
日落ちてより梔子の花饒舌
街角の寸の空地や立葵
湧水の涼しさ掬ぶ山路かな
隠沼の歌ひ出したる夕立かな
門口の燃ゆる凌霄火葬場

梅雨冷

菅野日出子

腰痛をかこつ齡や梅雨の冷え
産土神の裏参道や蛇の衣
梅雨寒や三味の音もるる格子窓
つかの間の雲幾度も梅雨の月
山鳩のつがひ呼び交ふ梅雨晴間
町の子の知らぬ甘さや桑葚
売地札立つ貸農園や草いきれ
読みさしのページそのまま明易し
我が卒寿祝ふはらから鱧料理
二番子の軒に大きな口競ひ

乙 矢集

配列は音順（当月巻頭作家は
次号は末尾になり以下同じ）



半夏生

齊藤マキ子

雨 蛙 加藤静江

少年のこぶし開くや雨蛙
梅雨晴間昼の魚河岸がらんだう
古き佳き時代の駅舎燕の子
海上の終着駅や蛇の衣
斜張橋の二基を望むや夏の海
楠の大樹を揺らす風青し
尊舟沼は静かに雨の中

山百合 堺 昌子

山百合や裾ひく富士は天をつき
梅雨晴のまだ見つかからぬ四つ葉かな
あやめ咲く神宮よりの風頬に
梔子の花の白さや宵の口
束の間の梅雨の晴れ間や子等の声
神宮の列長長と菖蒲園
目に染みる白一色や蓮の花

斑 猫 高木邦雄

八ヶ岳夕焼雲の棚引きて
蟠り解くる夜風の端居かな
風孕み白き水脈引くヨットかな
斑猫やかつて武士駆けし径
紫陽花の長き参道雨意の風
暁光の赤富士過る雲速し
青嵐抗ふ葦を靡かせて

雲の峰 今村千年

みささぎの石のきざはし岩たばこ
下町やどの路地行くも七変化
老いてなほ一途のこころ雲の峰
少女のごと妻佇めり夕焼空
をさなごのふくらむほつぺさくらんば
あまだれのピアノのしらべさみだるる
磯風の藤村旧居山桜桃

大夕焼 及川照子

いかづちに赤肌ひるむ博打の木
肩車の動かぬ父子や大夕焼
パソコンの機嫌と対峙明け易し
日焼け児の笑顔の中の皓齒かな
ラムネ飲む旧街道や昭和の香
紙魚走る小学唱歌の表紙裏
郷愁や蚊帳吊草を裂いてみる

青田風 大川暉美

咲く薔薇へ崩るる薔薇へ足止めて
朝影をきらりと弾く清水かな
菩提寺や青き香さやぐ今年竹
頂へ四囲の万緑盛りあがり
見はるかす田や嫋嫋と青田風
余りある海風軒に江戸風鈴
茄子漬の色も馳走や朝の膳

半夏生

岡田史女

シレットターの詰まりやすさや半夏生
木斛の花の散り敷く石畳
野も山もけぶれる里や合歡の花
梅雨蝶へ水車は水を吐き出せり
堰落つる音に和したる牛蛙
十一や相伝の田を手放すと
かはほりの過ぐるや橋を渡るとき

夜の眉

小田嶋野笛

朝の眉引くや桑の実落ち続き
気休めの膏葉二枚梅雨最中
父の日の鳥声ちちちと聞こゆ
昼の蚊に足の三里を刺されもし
諸事万端手抜き上手の冷奴
浮き来れば沈むるばかり浮いてこい
夜の眉を落とす窓辺へ蛾の寄り来



青炎集

黒滝志麻子選



横 浜

神 谷 さ う び

横 浜

山 崎 稔 子

睡蓮の池の底より日暮れ来る

水鏡して睡蓮の黄の眩し

飛び石の五六歩ほどの池涼し

潦飛んで見よとや道をしへ

梅雨湿り時刻の合はぬ花時計

清冽なる水の恵みや花山葵

アドバルーン男も日傘さす銀座

ト口箱は雑魚場の名残り七変化

潮風涼し終点の無人駅

雲離れ中天統ぶる梅雨満月

実生の枇杷鳥啄むを得心す

庭の大樹日向日陰を梅雨の蝶

平 塚

尾 崎 千 代 一

横 浜

東 小 菌 美 千 代

大正の梁の涼しき茶房かな

夏帽をほめ合ふ北の旅へかな

白シャツの光る校章渡船発ち

窯跡の日射す茂みや島の道

ペン胼胝の柔くなりたり夕端居

子へ譲るアンモナイトや夏休み

ほうたるの仮名の恋文闇に浮き

格子戸を抜けて梔子香りくる

リハビリの姉からの文若葉時

そぞろ行く池の八つ橋半夏生草

噴水や水の女神は甕を持ち

風走る峡の棚田や夏燕

虎が雨傘手にあれどそほ濡れて

鳩の浮巢守る男の齒の皓し

読書進む豪雨予報の多き梅雨

盆栽を引き立て細き文字摺草

子の箸を流し索麵潜り抜け

雲に隠れ織女渡らん鳥の橋

町田 伴 秋草

草野球の逆転ホームー風薫る

父の忌の僧に封切る新茶かな

一雨に一色重ね七変化

青梅雨や旅先に買ふ軽き傘

錆のうく濡れ縁の釘梅雨湿り

溪流の空をけがらせ岩魚焼く

横浜 遠藤清子

足場組む青年の背や青葉風

紫陽花や肌にあつはる雨意の風

梅雨の昼灯して夫の爪を切る

梅雨晴間下駄ひつかけて庭奔り

遠雷の何時迄続く雨の真夜

梅雨明くるか雲行きを見る考譲り

横浜 外山生子

梅雨空や小江戸に響く時の鐘

梔子の真白に咲きて朝新た

手捻りの匂ふ陶土や夏の雨

箸置きも箸も青竹夏料理

夏薊咲けば眩しき雲のあり

緑蔭の男の子三人虫博士

横浜 塚越弥栄子

教会へ緩きスロープ新樹光

庭園の芝の整ひ花擬宝珠

花嫁の母の麗し黒揚羽

鉢の水満ちて睡蓮首擡げ

電線に翼を休め親燕

グラウンドを均す球児や梅雨の雷

横浜 上月智子

ご赦免花首首首の砂湯なる

三度目の国土無双やながし南風

峰雲や飛行機雲の吸ひ込まれ

扶桑花や島に唯一の信号機

屋久島の猿の親子や立葵

木道のひしめく人や河鹿笛

横浜 小野弘正

耕 土 集

森清 堯選



新聞紙に実梅を並べ香の厨

公園の川音高し七変化

病院の葺簀圍ひの大玻璃戸

杖縫る母へ傾く日傘かな

風呂の児や水鉄砲を乱射して

横 浜 大庭美智代

もみあうて生簀の鯉や日の盛

店裏は鯉の生簀や杉風忌

振花を活けて夕づく文机

重信の俳句難し梅雨の月

浜宿の窓明りせり烏賊釣火

横 浜 小原 紀子

空の青海の碧さや沖纏忌

街角に讚美歌流れ虎が雨

黒南風や潮の香強き橋の上

子の上に小さき虹立ち水鉄砲

甚平の赤子抱きたる重たさよ

横 浜 滝口 洋子

朝霜に幽けかりけり沙羅の花

梔子の花なほ白く小糠雨

迸る短かき命蟬時雨

昼寝醒め吾に一貫の無重力

青大将滑りて揺らす濠の空

印 西 大坂 正

梅雨晴や青空かくも透き通り

ラジオより英民謡や梅雨の朝

雄蕊摘む百合やうらに白深め

烏賊売りの声に明くるや蝦夷の街

睡蓮の色際立ちてビオトープ

横 浜 友田 悠子

雨受くる術の非ずや破れ傘

吊橋の水影著し白日傘

老鶯や榊稚小櫓五葉松

黒揚羽行きつ戻りつ杜の道

行列の人馬一体夏祭

横 浜 大内 由紀

酔芙蓉

小川玉泉

(名誉顧問)

老鶯の二夕声のみや朝ぼらけ
幼子の手に手に掲ぐ笹飾り
たまさかにコップ磨きぬ大西日
前触れもあらず子よりの焼鰻
午後に入り桃色きざす酔芙蓉
初声にしては短かし法師蟬

雑記帳 27

最近の地球上の出来事をテレビや新聞などを
通して知る範囲内で、欲の塊の感じがする。人
命の尊さを考え直すことに、心向けなければ
ならないと思う。